

# 郭嵩燾の『周礼』「九両」解釈について

小野泰教

## はじめに

本稿は、清末の著名な士大夫でかつ清国初代駐英公使を務めた郭嵩燾（1818－1891）の『周礼』解釈を題材に、清末知識人における西洋認識と中国思想の結びつきの一端を明らかにすることを目的とする。

本稿が注目するのは、郭の『周礼』解釈のなかでも「九両」概念に関する解釈である。「九両」とは、『周礼』天官・大宰に見られる概念で、王者を補佐する官・大宰が人々の間につながりを生み出すために用いる九つの方法のことを指している。『周礼』の当該箇所を経文は以下のとおりである。

九両を以て邦国の民を繋く。一に曰く牧、地を以て民を得。二に曰く長、貴を以て民を得。三に曰く師、賢を以て民を得。四に曰く儒、道を以て民を得。五に曰く宗、族を以て民を得。六に曰く主、利を以て民を得。七に曰く吏、治を以て民を得。八に曰く友、任を以て民を得、九に曰く藪、富を以て民を得。

（以九両繋邦国之民。一曰牧、以地得民、二曰長、以貴得民、三曰師、以賢得民、四曰儒、以道得民、五曰宗、以族得民、六曰主、以利得民、七曰吏、以治得民、八曰友、以任得民、九曰藪、以富得民。）

筆者はすでに郭嵩燾の「九両」概念解釈について、西洋のアソシエーションに対する郭の認識との関連で考察を加えたことがある<sup>1</sup>。ただしそこでは、郭嵩

---

1 拙著『清末中国の士大夫像の形成——郭嵩燾の模索と実践』（東京大学出版会、2018年）、117-125頁、147-148頁を参照。

燾がなぜ西洋のアソシエーションを重視したのかという点に関心が集中したこともあり、「九両」概念自体に対する分析、とりわけ、中国思想史上における「九両」概念の解釈史に対する分析が不十分であった。他のさまざまな解釈との比較においてこそ、はじめて郭嵩燾の「九両」概念の特質がわかるはずであり、郭嵩燾が「九両」との関連で西洋のアソシエーションを捉えたことの意義もより明確になるであろう。また近年、清末知識人の「附会」説についても研究が進んでいるが<sup>2</sup>、そうした諸研究に対しても、「附会」が具体的にどのような営みであるのかなど、郭嵩燾を事例として新たな知見を提供できるであろう。

本稿では、以上の問題意識に基づいて、まず郭嵩燾が西洋のアソシエーションとの関連で「九両」概念に注目したことを紹介したのち、郭の「九両」概念解釈と他の知識人の解釈との比較を試みる。そしてそのうえであらためて郭嵩燾の「九両」概念解釈の特質を描き出したい。

## 1. 郭嵩燾の西洋認識と『周礼』「九両」

### (1) アソシエーションと「九両」

1878年8月8日、郭嵩燾は日記上に、Leisure Noble というアソシエーションへの加入の誘いを受けたこととともに、次のような記述を残している。

西洋の会堂は、中国に文社が存在するようなものである。漢魏六朝にはすでに存在した。『周礼』のいう「友、任を以て民を得」は、その遺意である。民を得るとは、民が互いに集まり、噂を聞きつけた者も我先に赴くということである。「九両」とは、寄り添い互いにつながるということである。漢以後の諸賢の注疏はその意味をすでに見失っており、そのために三代の遺

---

2 小野川秀美『清末政治思想研究』（みすず書房、1969年、増補版、平凡社東洋文庫、2009-2010年）、岡本隆司「華夏と夷狄——劉錫鴻『英軺私記』」（岡本隆司・箱田恵子・青山治世『出使日記の時代——清末の中国と外交』名古屋大学出版会、2014年、所収）、苗婧「郭嵩燾の西洋認識——「附会」論と文明観を手掛かりに——」（『洛北史学』第22号、2020年）などを参照。

風は減んで久しいことがわかる。

（西洋会堂、猶中国之有文社。漢魏六朝已有之。『周礼』所謂「友以任得民」、即其遺意也。得民者、民相与群萃州処、聞風者亦起争赴之、謂之「九両」、両相比而交互聯属之義。自漢諸賢注疏已失其義、故知三代遺風之就泯也久矣。）<sup>3</sup>

拙著でもすでに検討したように、郭嵩燾の西洋認識の特徴の一つは、当時西洋に勃興していた各種アソシエーションへの注目であった<sup>4</sup>。郭嵩燾がこれら各種のアソシエーションを「会」、「会堂」といった概念で捉えつつ重視していたことは、彼の渡英中の日記から知られる<sup>5</sup>。上記に見られるように、郭嵩燾は西洋のアソシエーションを『周礼』の「九両」概念と結びつけつつ描写しているのである。

また郭嵩燾はイギリスから帰国後、禁アヘンと人心風俗の改良を目的とする団体・禁煙公社を結成する<sup>6</sup>。禁煙公社には湖南の名士が集い、各種の講演を行ったが、郭嵩燾はその講演においても『周礼』の「九両」概念を重要なものとし

---

3 『郭嵩燾日記』第3巻（長沙：湖南人民出版社、1982年）、光緒4年7月10日、599頁。なお郭嵩燾は、Leisure Nobleについて、光緒4年3月23日の日記で「婦女考求学会堂」と記している。『郭嵩燾日記』第3巻、489頁。またこのアソシエーションの委員である「克里」（西洋名未詳）は、郭嵩燾に対し、郭の出使以後、従来中国に批判的であったイギリスの人々が中国を重視し、中国の学問を研究しようとするようになったと述べたという。『郭嵩燾日記』第3巻、光緒4年7月9日、598頁。

4 前掲拙著、第4章第3節を参照。

5 郭嵩燾は、日記（光緒3年10月29日および光緒3年11月18日の条）で、イギリスにおける人材学問の発展を論じる中で、「会」（ソサエティ）について描写している。『郭嵩燾日記』第3巻、356頁、370-373頁。前掲拙著、101頁を参照。なお、光緒3年11月18日の条のイギリス史叙述については、郭がミュアーヘッド（W. Muirhead）の『大英国志』を参照していたことが指摘されている。潘光哲「晚清中国「政党」的知識系譜——思想脈絡的考察（1856-1895）」（『中国文化研究所学報』第48期、2008年）を参照。

6 禁煙公社については、金培喆「郭嵩燾の対外意識と地域活動——以思賢講舍及禁煙公社為中心」（周維宏等主編『世紀之交的扶抉』北京：世界知識出版社、2000年、所収）などを参照。また拙稿『「勸誠社彙選」について——アヘン貿易反対協会と勸誠社』（『言語・文化・社会』第15号、2017年）も参照。

て取り上げているのである。郭嵩燾がアソシエーションとの関連でいかに「九両」概念を重視していたかが知られる。本稿第3節にて、この講演内容が記された日記の光緒9年2月11日の条に注目し、詳しく分析を行いたい。

以上のように、郭嵩燾が『周礼』の「九両」概念を重視し、さらには西洋のアソシエーションと関連づけ、また自身の実践としても行っていたことが知られる。だが、こうした郭嵩燾の思想的営為をさらに内在的に理解するためには、郭の「九両」解釈を、従来の中国思想史上における「九両」解釈史に位置づける必要があるだろう。そこで次節においては、漢代から清代に至るまでの「九両」解釈史について考察を行いたい。

## 2. 『周礼』「九両」の解釈史

### (1) 鄭玄

郭嵩燾の「九両」解釈との関連で考察したいのは、「九両」のなかでも、「友、任を以て民を得」（友以任得民）の解釈史である。郭嵩燾がアソシエーションとの関連で言及したのがまさに「友以任得民」であり、また禁煙公社での実践もそれを念頭に置いているからである。

解釈の起点となるのは、後漢の鄭玄の以下の解釈である。

友とは、井田をともにし、助け合って耕作をすることである。『孟子』に「一郷の田畑は八家ごとに同じ一井を耕させ、田畑への出入りにもお互い連れ立って行かせ、盗賊の見張りや防御もともに助け合わせ、病気の際には互いに看病しあうようにさせれば、庶民は自然と親睦するようになります」とある。

（友謂同井相合耦耨作者。孟子曰「郷田同井、出入相友、守望相助、疾病相扶、則百姓親睦。」）<sup>7</sup>

---

7 『周礼注疏』（北京：北京大学出版社、2000年）、47頁。

鄭玄によれば、「友以任得民」は、井田における農民の共同作業のあり方として解釈されるものであった。

その後の解釈史には、鄭玄のこの解釈を起点として、一方ではそれをさらに敷衍していくような方向性と、また他方では、鄭玄がなぜ「友」や「任」を農民の共同作業から解釈したのかに注意を払いながら考察を進めていく方向性とが存在している。本節では主にその二つの方向性に注目しつつ解釈史を取り上げてみたい。

## （2）賈公彦

『周礼』の代表的な疏の作者である唐の賈公彦は、鄭玄の説をさらに敷衍していく解釈をとっている。

八に曰く「友、任を以て民を得」について、「任を以て」とは同門の朋友のことではない。田里の間において互いに助け合うことをいう。互いに任用しあって民を得るのは、隣り合って集住する者である。……「友とは、井田をともし、助け合って耕作をすることである」とは、鄭玄の考えや経の意図は、師を同じくすることを友とするものではない。それはともに井邑の間にあって一緒に住むということである。

（「八曰友、以任得民」者、言以任、則非同門之朋友、謂在田里之間相佐助、以相任使而得民、即隣伍聚居者。……云「友謂同井相合耦勸作」者、鄭意經意非謂同師曰友、正是同在井邑之間共居。）<sup>8</sup>

賈公彦は、「友」が「同門の朋友」や「同師」ではないとして<sup>9</sup>、「友以任得民」

---

8 同上、48 - 49 頁。

9 注8の引用文の「同門之朋友」や「同師」について、賈公彦は、鄭玄が『周礼』地官大司徒の「本俗六」の「朋友」の語に対し「同師を朋といい、同志を友という」と注をつけているのを踏まえている。「本俗六」とは、万民を安んじるための六つの伝統的な良き風俗のことである。なお賈公彦は、鄭玄の「本俗六」の「朋友」に対する注について次のような解釈を行っている。「朋」は『論語』学而の「有朋自遠方來」にあるように、「在学」のことである。「本俗六」の「友」は、この「朋」と連文で

をあくまで農民の共同作業を表したものだとする。

以上が、「九兩」の「友」解釈の基準となる鄭玄と賈公彦の説であった。そして、郭嵩燾が日記の中で批判していた注釈者も、この二人と見て間違いないであろう<sup>10</sup>。では、郭嵩燾はこうした解釈のどのような点に不満を感じていたのか。それを理解するためにも、鄭玄・賈公彦以降、さらにどのような解釈史が展開されたのかを考察する必要がある。

### (3) 江永・呂飛鵬・孫詒讓

以下では、その後の解釈史として、孫詒讓の『周礼正義』を参考に歴代の流れを整理するとともに、郭嵩燾と同じく清末の知識人であった孫詒讓自身の解釈も取り上げてみたい。

鄭玄・賈公彦後の解釈史の特徴としては、「友」や「任」の概念を、農民の共同作業という場面に限定するのではなく、「友」や「任」をあらゆる社会層の人々にもあてはまる普遍的な概念と捉え、鄭玄はあくまでその一例として農民の共同作業を取り上げたのだとする見方をとる点にあった。

例えば、清の江永は次のように述べている。

「友、任を以て民を得」とは、道德品行や学問技術を勧めあい、吉であれば祝いあい、凶であればあわれみあい、緊急事態の場合には助け合い、余剰と不足とを通じ合うことである。井田をともにし、助け合って耕作をするのも、またその一つである。

(友以任得民、徳行道藝相勸、吉相慶、凶相恤、緩急相救、有無相通是也。而同井合耦耨作、亦其一。)<sup>11</sup>

---

あり、やはり「在学」のことである。「本俗六」では、この「朋友」が「師儒」の下に置かれている。ただ賈公彦によれば、鄭玄が「同師を朋といい、同志を友という」といったかたちで、「朋」と「友」とをわけて説明しているのは、「朋」が疎遠で数が多いのに対し、「友」は親しく数が少ないという違いがあるからだという。同上、311頁。

10 『郭嵩燾日記』第3巻、光緒4年7月10日、599頁。

11 『周礼正義』第1冊（孫詒讓撰、北京：中華書局、2013年）、115頁。

また清の呂飛鵬は次のように述べる。

任とは、「六行」の「任」である。大司徒の注にいう「任とは友道において信たり」のことである。『説文』には「任は保である」とある。大司徒「五家を比となし、これをして相い保たしむ」の注に「保とは任のようなものである」という。二つの意味を兼ねてこそ完全である。

（任即六行之任、大司徒注云「任信於友道」是也。説文云「任、保也」。大司徒「五家為比、使之相保。」注云「保猶任也」。二義相兼乃備。）<sup>12</sup>

呂によれば、任とは、『周礼』地官大司徒の「六行」のなかの「任」である。「六行」とは民を教化するための郷学における教育法の一つであった。鄭玄注にしたがって、任は、「友道において信たり」と解釈されるとともに、「保」の意味も兼ねるとされている。

そして孫詒讓は、以上の江永および呂飛鵬の説に依拠しつつ、次のような解釈を行っている。

この「友」は大司徒「本俗六」の「朋友を聯ねる」のことで、四民すべてに対していっている。それが互いに誠実で安んじあうという義を持つことから、「任を以て民を得る」というのである。鄭玄が農民のみに帰属させているのは、一部分のみをあげて意味を明らかにしているのである。

（此友即大司徒本俗六之「聯朋友」、蓋通於四民言之、以其各有相保任之義、故云「以任得民」。鄭專屬農民、偏拳一耑以見義耳。）<sup>13</sup>

孫詒讓は、「九両」の「友」を、本稿注9で前述した『周礼』地官大司徒の「本俗六」の「聯朋友」であるとする。そして彼は、「本俗六」の「朋友」について

---

12 同上。

13 同上。

は、「朋」が同門、「友」が同志とする従来の解釈をとっている<sup>14</sup>。さらに「友」は、「四民」に共通の概念であって、お互いに信をもって保ちあうことを「以任得民」であると解釈する。鄭玄が農民の共同作業に言及したのは、一例を示すことでこの朋友のあり方を示そうとし、またそうした議論の流れから孟子の「郷田同井」を証拠としてあげたのだとする<sup>15</sup>。

こうした鄭玄・賈公彦以後の「九両」解釈、とりわけ「友、以任得民」に対する解釈史には、「友」を、人々一般が互いに誠実で安んじあうという関係性だとみなす傾向があったといえよう。

では、こうした解釈史を念頭に置いた場合、郭嵩燾の「九両」解釈、特に「友、以任得民」に対する解釈は、どのような特徴を持つものといえるのであろうか。この点を次節で検討してみたい。

### 3. 郭嵩燾の「九両」解釈の特徴

#### (1)『論語』顔淵の「以文会友」

本節では、郭嵩燾の「九両」解釈の特徴を考えてみたい。本稿第1節で紹介したように、郭嵩燾は「九両」の「友」概念と西洋のアソシエーションとを結びつけていた。そしてそこでイメージされていたのは、文芸に基づいた知識人による集団であったといえる。

こうしたイメージを、前節で検討した解釈史と比較してみると、従来の解釈史が「友」や「任」を農民のあり方として捉えたり、また一方では広く普遍的な人々のあり方として捉えたりしていたのに対し、郭嵩燾の解釈は、「友」や「任」を知識人層のあり方に限定していく方向性を持つものであったといえることができる。

そして郭嵩燾は、この「九両」の「友」を根拠に、知識人の集団活動を正当化していくのである。では、郭嵩燾のこうした「九両」解釈はどのような根拠

---

14 『周礼正義』第2冊（孫詒讓撰、北京：中華書局、2013年）、750 - 751頁。

15 『周礼正義』第1冊、115頁。



に基づいて生み出されているのだろうか。

まず、郭嵩燾と他の解釈者との顕著な相違は、「九両」の「友」概念を、『論語』顔淵の「以文会友」に結びつけて解釈していることである。『論語』顔淵の当該箇所の経文は以下のとおりである。

曾子曰く、君子は文を以て友を会し、友を以て仁を輔く。

（曾子曰君子以文会友、以友輔仁。）

「文によって友を集める」主体は「君子」であり、友を集めた君子はそれにより「仁を輔ける」ことが目標とされている。

郭嵩燾は、以上の「以文会友」を、次のようなかたちで「九両」と結びつけている。

「友」とは「文により友達を集める」ようなものだ〔『論語』顔淵〕。老聃には孔子以前にすでに門徒がいた。孔子の門徒は三千人にのぼった。子華が斉の国に使いに行った時、〔その留守中の母のため〕冉子が孔子に粟を請うた〔『論語』雍也〕のが、任〔誠実さ〕という意味である。

（「友」如以文会友。老聃在孔氏前、已有徒衆。孔氏之徒至三千人。子華使斉、冉子請粟、任之義也。）<sup>16</sup>

「九両」の「友」は、この『論語』の「以文会友」の「友」と結びつけられることによって、あくまで知識人どうしの交流を描いたものへと解釈されていくの

---

16 『養知書屋文集』巻1、「周官九両繫民説」、6葉。訳文中の〔 〕内は筆者による。なおこの「周官九両繫民説」の執筆時期は未詳である。あくまで推測となるが、この文章は、本稿で取り上げる『郭嵩燾日記』第4巻（長沙：湖南人民出版社、1983年）、光緒9年2月11日、364 - 366頁に収められた禁煙公社での講演内容に密接に関わっている。禁煙公社で行われた別の講演内容が『養知書屋文集』巻2所収の「論士」として収録されていることから（王興国『郭嵩燾評伝』南京：南京大学出版社、1998年、378頁を参照）、「周官九両繫民説」についても、禁煙公社での講演との関連で執筆されたものではないかと思われる。

である。

## (2)「九両」に基づくことで何がいえるか

では、なぜ郭嵩燾は『論語』顔淵の「以文会友」を重視するだけでなく、それをあえて『周礼』「九両」の「友」と結びつけようとしたのであろうか。以下ではこの点を考察することで、郭嵩燾の「九両」解釈の特徴を明らかにしたい。

### (a)「九両」の「師」・「儒」との関係

まず注目したいのが、「友」による知識人集団と、同じく「九両」に含まれる「師」・「儒」という概念との違いである。郭嵩燾は、「友」の重要な事例の一つとして、孔子とその弟子たちの講学を取り上げていた。では、それは「九両」の「師」や「儒」のあり方とどのように異なるのであろうか。

郭嵩燾によれば、「師」と「儒」は、国家を統率するという高い立場で教育に従事する者のことを指す概念であった。

大司楽および師氏・保氏は国子の教育を担ったが、これらはみな「師」である。成均の法では、徳や道を有する者に教えさせたが、これこそ「儒」である。この四者〔「九両」のなかの「牧」、「長」、「師」、「儒」〕は、国家を統率するものである。

(大司楽及師氏、保氏、任教国子、皆「師」也。成均之法、凡有徳者有道者使教焉、則「儒」也。是四者、制之国家者也。)<sup>17</sup>

こうした「師」や「儒」に関する解釈自体は、おおむね鄭玄らの説に沿ったものといえることができる。

一方、郭嵩燾によれば、「友」は「学行有る」者に任せて相互に結びつかせた集団であったという<sup>18</sup>。この「友」解釈と上述の「師」・「儒」解釈を合わせてみると、郭嵩燾が「友」を国家レベルの教育とは区別された、知識人どうしの関係とし

17 『養知書屋文集』巻1、「周官九両繫民説」、6葉。訳文中の〔 〕内は筆者による。

18 同上。

て捉えていることがわかるのである。

興味深いことに、以上の点について、孫詒讓の解釈は郭嵩燾のものとは大きく異なっている。孫詒讓は、「師」や「儒」を上述のような国家レベルの教育者とは必ずしも捉えていない。孫の解釈によれば、どの社会層に属するかにかかわらず、人を教えることのできる者が「師」であり、学問・文芸に通じている者が「儒」とであるとされる<sup>19</sup>。「師」や「儒」は、あらゆる社会層に普遍的に存在するものといえるのであった。こうした孫詒讓の解釈においては、郭嵩燾のように国家レベルでの教育か、知識人どうしの講学かという観点は存在していないのである。

このように「九両」は、郭嵩燾のような解釈をとる場合、国家レベルでの教育とは異なる、知識人どうしの集団の独自の位置づけを見出させてくれる論理を提供するものであった。この点こそ、郭嵩燾があえて「九両」に基づきつつ、知識人による集団活動の正当化を図ろうとした理由の一つといえることができるであろう。

#### (b) 「両」の解釈

また郭嵩燾が、特に「九両」の「友」概念に注目して知識人の集団活動の正当化を図ろうとした要因の一つは、「九両」という概念自体への郭嵩燾の独自の解釈と関係があると思われる。郭嵩燾は「九両」の「両」の字を、従来の解釈史にも見られた「聯」や「属」という概念で捉えるとともに、「对待」という概念でも捉えているのである。「对待」は、郭嵩燾の文脈においては、事物の相対的な関係を指す概念として用いられている。

両というのは、互いに対待をなすということで、此れに即して彼を知り、彼によって我の正否を確かめるとのことだ。

（両者、相為对待、即此以知彼、因彼以証我。）<sup>20</sup>

19 『周礼正義』第1冊、112頁。

20 『郭嵩燾日記』第4巻、光緒9年2月11日、364頁。

そしてここでは郭嵩燾の次のような人間観が前提となっている。それは、人間は霊長であるからこそ、放っておけば対立し、離散する可能性があるというものである。

天が万物を生じる際、人のみが最も優れているが、優れていれば必ず互いにいざこざがなく過ごすことはできない。聖人は人情を周到に考え、人心が最も優れていることを知っており、人に頼りとし帰順するものを持たせることで、自身の生を理解し自身の性に順応させようとした。  
(蓋天之生万物、惟人最靈、靈則必不能相安無事。聖人熟体人情、知人心之靈、必使有所倚附繫属、以達其生而遂其性。)<sup>21</sup>

郭嵩燾にとって「九両」の役割は、単に人々を集団化し協力させるという点にあるだけでなく、さらに、自己が他者の存在においてこそ成り立つということを示すことで、人どうしの対立を回避させる点にも求められるのである。

注目すべきは、郭嵩燾が上述のような「九両」解釈に基づいて知識人集団をイメージしていることである。つまり、知識人は集団を形成しようとする、対立するのが常であるという認識である。

拙著でもすでに示した通り、郭嵩燾の生涯の問題意識の一つは、いかにして知識人どうしが良好な関係を築くかという点にあった。郭の認識によれば、知識人どうしの不和は、人心風俗に悪影響を与えることこのうえないもので、最終的には国家の存亡にまで関わるものなのであった。例えば、郭嵩燾の見るところ、アロー戦争時期の主戦論派は、宋代の議論に影響を受けた士大夫たちの無謀な集団活動であり、彼らが国家へ与える損害は甚大なものであった。また、郭嵩燾が西洋の議会制度を目の当たりにした時、それを中国の「党争」と結びつけて危険視するも、二大政党制の安定的な運営を知るにつれて、西洋の人心風俗の優秀性を認めたことなどは、彼の問題意識の所在を物語っている<sup>22</sup>。

---

21 同上、364 - 365 頁。

22 この段落の叙述については、佐々木揚『清末中国における日本観と西洋観』（東京大学出版会、

このような認識を有する郭嵩燾にとって、人間の不和を前提としてその協力を志向し、かつ相互に自他関係を意識させる「九両」という発想は、知識人の組織論として非常に重要なものと映ったのである。

また以上のことと関連して、先に取り上げた郭嵩燾の「以文会友」（『論語』顔淵）に対する解釈が、従来の一般的解釈と論調を異にしている点も注目される。本稿注16で引用したとおり、郭嵩燾は「九両」の「友」を解釈するうえで重要な概念である「任」を、『論語』雍也の子華と冉子との関係から説明しようとしていた。

その『論語』雍也の故事によれば、子華が齊の国に使いに行った際、冉子は、子華の留守中の母の身を案じて孔子に粟を請うたという。ここで注目すべきは、周知のとおり、冉子は最終的に自らの判断で孔子の指示した以上の粟を子華の母に与え、孔子からその行いをたしなめられていることである。孔子の考えでは、君子たる者、困っている者は助けるべきであるが、子華の家のように裕福な者に対しては、必要以上に多くの施しをすべきではなかったのであった。

ところが、郭嵩燾はむしろこうした冉子の行いを、子華と冉子との良好な関係性という文脈で好意的に捉え、まさにこうした両者の関係こそが「任」であると解釈しているのである。以上のような解釈には、君子個人のあり方のみならず、知識人どうしの関係性を非常に重視する郭嵩燾の知識人観が垣間見られるように思われる。

(c) 「九両」の中でもかろうじて後代に残った「友」概念

さらに、郭嵩燾があえて「九両」の「友」概念で知識人の集団活動の正当性を主張したもう一つの理由として、「九両」のうち「友」のみが孔子・孟子の貢獻によりのちの時代のまで残り得たという点が考えられる。

郭嵩燾は、秦漢時代以降の「九両」の展開を次のように描き出している。

秦漢以来、九つが民をつなぐ方法はすべて捨て去られ、分散・背離した天下となり、兄弟や親族は安んじあわず、郷里はあわれみあわないようになっ

---

2000年）、83 - 89 頁、前掲拙著、第2章、第4章第2節を参照。

てしまった。孔氏、孟氏の学問の一派にのみ、なおおおむね保たれているものがある。漢の時代、経生の弟子は付き従って教えを受け、しばしば数千人となった。唐の時代では一変して文章を作るようになり、韓退之のごときは、泰山北斗として天下に아가められ、李翱や張籍の弟子は、みな心から彼らに従って天下に名声を立てた。程朱が現れると道はさらに尊いものとなり、従う者はいっそう多くなった。元をへて明に至るまで、数百年間しだいに継承され、風俗となった。

(秦漢以来、拳九者所以繫民而尽廢之、以成乎泮渙乖違之天下、至于兄弟親戚不相保、郷里不相恤。独孔、孟氏斯文一脈之流伝、猶略有存者。漢世經生弟子相従受業、動数千人。唐文〔世?〕一変而為文章、如韓退之泰山北斗、天下宗仰、李翱、張籍〔籍〕之徒、皆附之以立名天下。至程、朱出而道益尊、信従者益衆。歷元至明、数百年相襲以成風俗。)<sup>23</sup>

漢代の経生の弟子や、唐代の韓愈・李翱・張籍とその信奉者、そして宋代の程朱の信奉者や、明代の講学などが「友」の例とされているようである。

そして郭嵩燾の見るところ、かろうじて継承されてきた「友」の伝統は、清代において途絶えてしまっていた。

本朝の経学を研究する学者は、漢や唐にはるかにまさっているが、前代の講学の風俗はここにいたってみな捨て去られ、天下の民を帰順させるものが一つもなくなってしまった。奸民のリーダーがかえって会堂の名をかり、私的に口実を設けて結託するのである。

(国家治經之儒、曠越漢、唐以上、而前代講学之風至是而尽廢、遂使天下之民一無所繫属。奸民之雄者、乃假会堂為名、私立名目、以相勾結。)<sup>24</sup>

「九両」の「友」のあり方が途絶えたところに現れてくるのは、一見「会堂」よ

23 『郭嵩燾日記』第4巻、光緒9年2月11日、365頁。原文の〔 〕内は『郭嵩燾日記』点校者による。

24 同上。

うでありながら、実は単に「奸民の雄」が組んだ徒党にすぎない集団なのであった。

郭嵩燾が考える知識人の理想的な集団活動と「奸民の雄」による徒党との違いは、次の点にあった。すなわち、「九両」に基づく郭嵩燾にとって、知識人の集団活動は、最終的には天下の人々の結びつきを強固にするという目標を有していたのである。一方で、「奸民の雄」による徒党は、天下の人々の結束を目指す「九両」の流れとは無関係なものであり、したがって、「私的に口実を設けた」ものにすぎなかったのである。

さらに郭嵩燾の同時代認識として次の点も重要である。

『書経』に「天は下なる人民を降し生じ、それを治めるために君たり師たる者を立てる」とある。君と師の二者が、いったんその人民をつなぎとめることができなくなれば、褒美を与えて人民を邪まにさせてしまうのは、勢いとして当然のことである。乾隆以後、各県にはみな書院がたてられ、学校は最も盛んである。しかしみな利によって誘導しているため、学問の源流や本末において、教たるゆえんをことごとく失ってしまっている。人心風俗を害するであれば、損があるだけで益がない。校經堂や思賢講舎を創立した理由は、ひとえに学校の好ましくない状況を挽回することを願ったからである。この禁煙公社もまたあわせて運営し、賢士大夫および後進聰明の士とともに講習させ、聖人が学問を立てた意図をうかがい知ることによって人心をつなぎとめ、学問を探究させることを期待する。儒者が道を以て民を得るといふ盛んさは期待できないものの、人心を整え合わせてばらばらにさせないようにし、古人の「文を以て友を会す」の道理を少しばかり保ちたいと思う。

（『書』曰「天降下民、作之君、作之師」。君、師二者、一不足以聯属其民、乃相獎以急入于邪、亦勢之所必趨也。乾隆以後、各県皆立書院、学校為最盛。而一以利誘之、于学問源流本末、全失所以為教、直使敗壞人心風俗、有損無益。所以創立校經堂、思賢講舎、求一挽学校之陋。而此禁煙公社亦遂相附以行、期使賢士大夫及後進聰明之士共相講習、以窺知聖人立学之旨、因以繫属人心、

使驚于学。不敢希儒者以道得民之盛、亦庶幾齊合人心、使不至于渙散、略存古人以文会友之義。<sup>25</sup>

「師」が本来の影響力を有しておらず、また「儒」の影響力も容易には期待できない当時の状況下において、それらの欠を補うため、知識人の集団活動の本来のあり方である「友」を再度見出し、人々の結びつきの重要性を世に知らしめる必要があったのである。

また、知識人の集団活動であっても、「利」に基づいて行われるのであれば、理想的な集団活動ということとはできない。こうした観点は、前述した「私的に口実を設けた」「奸民の雄」に対する郭嵩燾の批判にも通じるものであろう。郭嵩燾の見るところ、「友」とは、「利」に基づく集団とは区別された集団形成のあり方だったのである。

郭嵩燾にとって知識人の集団形成は、まさに「九両」の理念——天下の人々を離散させず真に結束させること——の実現を最終目標とする、重要な活動として位置づけられていたのである。

## おわりに

以上、本稿は、郭嵩燾の「九両」解釈の特徴を、従来の『周礼』解釈史との比較によって明らかにした。

郭嵩燾の「九両」解釈を従来の解釈史に位置づけてみると、次のような顕著な特徴が明らかとなった。すなわち、従来の解釈が「九両」の「友」概念を、農民のあり方や、あらゆる社会層の人々に共通するあり方として重視していたのに対し、郭嵩燾は「友」を、知識人の理想的な集団活動のあり方を示すものとして重視していたことである。

郭嵩燾は、『論語』顔淵の「以文会友」と「九両」の「友」を結びつけつつ、知識人の集団活動の理想的な運営こそが、最終的に天下の人々すべてを真の意

---

25 同上、365 - 366 頁。



味で結束させ、秩序を構築することにつながっていくというヴィジョンを描いていたのである。

またそうしたヴィジョンの前提として、次のような認識があったことも重要である。すなわち、人は放置しておくとか対立を引き起こしやすい存在で、それは知識人であっても例外ではなく、むしろ知識人どうしの対立こそは、人心風俗に与える影響力の大きさから第一に解決されるべき課題であるという認識である。

以上のような解釈をとる郭嵩燾にとって、同時代的に進行していた西洋のアソシエーションの活発な活動は、まさに知識人集団をもとに西洋諸国がまとまっていく過程にほかならず、自身の主張を正当化する事例として捉えられたに違いない。

一方、本稿の考察によって次のような点も浮き彫りとなった。すなわち、従来の解釈史において、「友」を社会層に左右されない人間一般の普遍的なあり方として捉える流れがあったことである。特に孫詒讓は、「友」についてそのような解釈を採用しているのみならず、「師」や「儒」についてもあらゆる社会層にそうした存在を見出そうとしており、大変興味深い。今後はこうした方向性を持った解釈についても、その思想史的意義をより一層明らかにしていきたい。

（本稿は、2019年度学習院大学外国語教育研究センター研究プロジェクト「中国近代における西洋思想受容の特質——イギリス、フランス、ドイツ、アメリカ思想を中心に」の成果の一部である）

## 郭嵩焘的《周礼》“九两”诠释

小野泰教

本文的目的是探讨郭嵩焘的《周礼》“九两”诠释。《周礼·天官·大宰》中的“九两”，是圣人为了建构人与人之间良好关系而创造的九种方法。郭嵩焘特别重视其中的“友”，并试图透过“友”这个概念来解释西方各种社团的意义。

本文将借由比较郭嵩焘的“友”诠释及其与历代表性注释家如郑玄、贾公彦、江永、吕飞鹏、孙诒让等的异同，以阐明郭嵩焘的“友”诠释在中国思想史上的几个特点。值得注意的是，郭嵩焘结合了“九两”中的“友”和《论语·颜渊》“以文会友”的“友”观，以主张知识分子团体的社会意义。郭嵩焘认为，知识分子彼此之间的良好关系将产生良善的人心风俗，最终也将对国家的安宁造成影响。对郭嵩焘而言，“九两”可谓是一个为了改善知识分子间的相互关系，并据以构筑国家整体秩序的重要理论。